



山岸徳平・岡一男監修

# 原氏物語講座

有 精 堂

源氏物語講座

第二卷 成立と構想

昭和四十六年六月一日発行

監修者

岡山

岸

徳

男平

発行者

山

崎

誠

発行所

有精堂出版株式会社

東京都千代田区神田神保町一―三九

電話〇三(二九一)一五二―番

振替口座東京四〇六八四番

郵便番号 一〇一

◇乱丁・落丁はおとりかえいたしません。

文弘社

## 《目次》

源氏物語の成立・構想の問題

1

秋山虔

源氏物語の構成と構造

26

森一郎

源氏物語の第一部について

55

池田勉

|                |     |        |
|----------------|-----|--------|
| 源氏物語の第二部について   | 91  | 野村精一   |
| 源氏物語の第三部について   | 122 | 藤村潔    |
| 源氏物語の並びの巻について  | 162 | 門前真一   |
| 源氏物語の成立・構想論の研究 | 198 | 森岡常夫   |
| 源氏物語の成立年代とその経緯 | 229 | 阿部秋生   |
| 源氏物語の構想と方法     | 260 | 目加田さくを |

## 源氏物語の成立・構想の問題

——戦後の成立論の始発、武田・風巻・池田三氏の研究をめぐって——

秋 山 虔

### 一 は し が き

「源氏物語の成立・構想の問題」という題目によって何を論すべきであるか。この「源氏物語講座」の第二巻に、「源氏物語の成立・構想論の研究」という項目もあつて、別に研究の概要もまとめられるようである。また、第一・二・三部に関して、具体的に成立や構想の問題点が明らかにされることになっているのであるから、ここで詳説の必要もないであらう。しかもじつは私自身、こうした問題そのものについては従来ながしかの自説を主張したことはないから、じつはこの題目では、はなはだもって書きにくいのだ、といわざるをえない。しかしながら、とくに戦後の研究史において、おそらくもつとも論義がわいた、しかもその論義がどう決着ついたのか必ずしも明白でない、この成立・構想の問題について、いまの時点から、批判的に回顧しておくことは自分にとって必ずしも無駄なことではあるまい、という意味で、以下のおぼえ書きを提出しようというわけなのである。

さて源氏物語の成立と構想に関する研究を、いま私は戦後の研究史においてもっとも論義された問題といったが、それは具体的には主として武田宗俊氏の「源氏物語の最初の形態」(「文学」昭和二五・六、七)

をはじめとする一連の論文（後に『源氏物語研究』へ昭和二九）にまとめられた）、風巻景次郎氏の「源氏物語の成立に関する試論」（『文学』昭和二五・一二、二六・一）以下の、これはついに未完に終わった一連の論文（後に『日本文学史の研究（下）』昭和三六、および『風巻景次郎全集』第四卷へ昭和四四）に収められた）によって提起された、そしてまた反論もほぼそれらに向けてなされたところの、研究が焦点となるのである。

ところで、右の両氏の論考は、いきなり突如として学界に提出されたかのような印象をもつが、それは戦中から戦後へかけての国文学研究の一般的な低迷が、ようやくこのころから沈着な立ち直りを見せ、戦後的な研究の足どりが開けてきたことと軌を一にするものであるからにはかなるまい。じつところそれらには先蹤があり、こうした作業を学界に送り出そうとする研究の命脈があったのである。溯源していえば、早く大正末年に発表された和辻哲郎氏の「源氏物語について」（『思想』大正一一・一一）に行きつくわけであるが、その後の佐佐木信綱氏、与謝野晶子氏らの説をも併せて、諸家の考説、ことに青柳秋生氏説（『源氏物語執筆の順序』『国語と国文学』昭和一四・八、九）や玉上琢弥氏説（『源語成立攷』『国語国文』昭和一五・四）などを通過して、武田氏、風巻氏らの研究の出現する過程あるいは研究動向については、すでに稲賀敬二氏の「源氏物語成立論の輪廓」（『源氏物語講座』第三卷昭和二八）のごとき論文にすぐれた批判的整理がなされているし、また『源氏物語必携』（昭和四二）中の「成立と構想」の項、『講座日本文学の争点（中古編）』（昭和四三）中の「源氏物語成立論の争点」も、同じ稲賀氏が執筆を担当している。また最近では阿部秋生氏編『諸説一覽源氏物語』（昭和四五）において、柳井滋氏執筆の「執筆順序、後記挿入に関する諸説 一研究の推移の大略」の項などに、研究の推移の総覧が試みられているのは有益である。そしておそらくこの講座の本巻においても、この問題がどう提起され、どう論義が推移していったかについて、他の執筆者によって具体的に解説されることになるのであろう。したがって

ここでは、一々論の内容に立ち入る必要はなさそうである。いわば鳥瞰的巨視的な、あくまで私なりの地図を描いて行くにとどめたいのである。

## 二 玉上琢弥氏の発想と成立論批判の視座について

さて、源氏物語の成立・構想についての研究が、そうした研究に対する反対論をふくめて明らかに一つの潮流を形成しつつあった時期に、一貫して、これに独自の批判的立場をとってきた玉上琢弥氏の歩みを、いま私は思い起こすのである。

成立の問題が事実どうであったにせよ、平安時代の昔から現在の姿で『源氏物語』は読まれて来た。しかし今のわれわれが現在の姿で『源氏物語』を読むと、ずいぶん奇異に感ずる点がある。「物語」は作中人物の生活のほんの一部分を描くに過ぎない。描かれざる部分が、物語の外に広く存することを、この物語は明示する。現代に生きるわれわれの目から見れば、その描かれた部分と描かれざる部分と、いずれが重要か、疑問なきを得ぬ。作者は、われわれとは違う標準をもって、描くべき部分を選び、排列したようである。その点をそのままに認めることにしたい。素直に『源氏物語』を読んで、そしてのちわれわれはわれわれで考え始めることにしたい。

この文章は、「源氏物語の構成」(『文学』昭和二七・二)の「論文要旨」として冒頭にかかげられているが、この本論のほうはどう進められて行くか。以下、その要点を述べておく。「帚木」「空蟬」「夕顔」の三帖につき、これは光源氏の挿話であり、かれの本来の生活が存在したと作者は意識して物語っているが、そうした光源氏が、葵上、中納言の君、中務、朝顔の姫宮、藤壺の宮、六条の女君、その他の女性を相手にして「言ひ消たれたまふ咎」も生じたであろう。そういう事件のいきさつを、現在の源氏物

語は正面きって写すことはせず、読者がすでに知っているものとして扱っているが、その作法をそのまま認め、賞讃しようとする旧来の立場に対して、佚巻を考えようとする立場がにわかに有力になってきた。このように述べてきて、玉上氏は次のようにいう。

阿部秋生氏の驥尾に付いて『源氏物語』の成立について考えたとき、定家が『奥入』に記しとどめた一説「輝く日の宮の巻」なるものについて、学者の注意を請うたのは昭和十五年の四月であった。(中略)ここ両三年来この記事を取り上げる方が多くなつて、「輝く日の宮」の巻のかつての存在とその後の散逸を認めるかどうか、源氏物語研究の新派と旧派との区別法の一つになった観がある。『源氏物語』といへば、『玉の小櫛』と『評釈』とに従つていればよかつたところに比べると、まことに隔世の思いがあり、御同慶の至りである。

されば、わたくしがここに、「帚木」「空蟬」「夕顔」の三巻に見える上の品むきの女性を数えあげたことは、これらの活躍した「輝く日の宮」の巻が存在したことを重ねて主張しようがためだ、と思われる方があるかもしれない。「若紫」の巻と「末摘花」の巻は、光る源氏の病氣や朱雀院行幸や紫のゆかりの若君を共有して、重なり合っていることをありありと示しているが、「輝く日の宮」巻と「帚木」「空蟬」「夕顔」三巻との間にも同じような関係があったと考えると、いまさらのごとくわたくしが説こうとしているのだ、と思われる方があるかも知れない。

しかし率直にいえば、わたくしは成立の問題にあまり興味を持たない。もし「輝く日の宮」の巻がかつて存在し、何らかの事情で(どんな事情か、わたくしには想像もつかないが)散逸したのなら、しかも散逸したままに読者が観照しえたのなら、それはどういう観照のしかたであつたのだろうか。わたくしの興味は、やはりここに帰って来る。

この玉上氏の文章の文体は、はっきりと成立論に対する嫌惡の表情を見せているが、これを読むとき、

氏が「輝く日の宮」の存在を想定する説の最初の提出者であっただけに、奇異の感じを抱かせることになるかもしれない。が、じつはこれは玉上氏の「転向」声明では決してないのである。かつて源氏物語の成立事情について、まったく新鮮な問題提起をこころみた玉上氏の研究の方向性が、戦後の一見玉上氏の見解に直結するかに見える成立論義と本質的に土俵を同じうし得るものではなかったことを、明示しているにすぎないのである。

われわれは昭和十五年に書かれた「源氏成立攷」を顧みる必要があるであろう。その長大な論文は、もともと単純に源氏物語の成立過程を追求するものではなかったのである。以下要点をあげると、①「夢の浮橋」巻は完結ではなく中絶であろう。②物語の各巻それぞれ独立的と見られもするが、とりわけ「藤裏葉」巻は、物語の幸福な結末をつける巻である。(これは①の考えを補強する)③「桐壺」巻は、それぞれ人生の種々相に光をあてる各帖が積み重なって、それが源氏の物語として声価を得たのち、読者の要望に応じて主人公の系譜を説明するために論理的に作りあげた発端であると想像される。その書き添えの時期は「玉鬘」の並び前後。④中の品の物語である「帚木」「空蟬」「夕顔」の三巻は、作者紫式部が里居のころ、まず一まとめに発表されたが、好評を得、やがて彰子に召されてのち、上の品の物語を書き継ぎ、長篇に仕立てる決心がついたのち、「桐壺」を書き添えたと考えられるが、また源氏物語の最初は「若紫」の一短篇があったという考えも妥当である。「桐壺」巻で源氏物語が書き起こされたという説は、五十四帖一まとめの発表と考えられぬ以上、認めることができない。⑤短篇群の巻々として書きはじめられた現行の源氏物語以前に、当時無数に存在した上の品の物語の一つとして「輝く日の宮」巻を想定し得る。その「輝く日の宮」を引きはなして、源氏物語は長編として成長して行った。⑥紫式部日記の寛弘五年十一月朔の公任の「此のわたりに若紫やさぶらふ……」の呼びかけを検討

するに、そのころまで書かれていた源氏物語には、まだ「上」とよばれる紫上は登場していない。宮仕以後、断続、書きつづけた短篇の集まりが長篇となった。⑦「並びの巻」は、もつとも矛盾のない説明としては、それが構想研究の表示ではなく、一まとめに発表されたという成立事情によるであろう。以上のようないくつかの仮説を提案した玉上氏の論は、その推論の過程なり様式が問題なので、右のように箇条にまとめてしまふとじつはその真意を伝えることは、できなくなるおそれがあるが、そこには右のような結論そのものを強く主張するという姿勢は極度にひかえられている。少なくともここでうち出されたいくつかの考えかたは、それ自体をさらに補強し、確証し、前進させるという方向性をもたないのである。この論文の末尾で、氏はいう。

この仮説を触媒として、私は「源氏物語」の構成美にすすみたいのである。この仮説による時は、「源氏物語」は元来短編を積み重ねたものである。だからいくらでも書きついでゆけるし、またどこでも切れるのである。作者自身長編たる形式も整えようとしたし、また後になるに従って数帖にわたって構想が緊密であるものも作ったりするが、やはり短編の集合であるという本意は変えなかった。一編ずつまたは数編ずつを作者はまとまりをつけて発表してゆく。だからたまたま「夢浮橋」で中絶しても、そこまでのものとして『源氏物語』は観照できたのである。

こういう成立であり本質であるがゆえに、作者は各帖の構成に、また帖と帖との連絡に、特殊な技巧をこころみた。その技巧のもたらした美、構成美を、われわれは久しく注意しないでいたようである。芭蕉の連句の句付の美にも似た構成美を、『源氏物語』のみならずわが国小説のあれこれに見いだせるように私は思う。……

このような文章をよく反芻してみるならば、玉上氏が戦後の成立論義に水をさすような口吻をもらす理由ももうなずけるのである。この「成立攷」における成立に関する言及も、源氏物語の本質的に短編の集

合体である、その構成や手法を把握しようとするに当たって、成立過程の面から、こういう仮説が成りたつであろうとするにほかならないのであって、だから戦後になって氏の姿勢に方向転換があったわけではないのである。

ところで、この「源語成立攷」以後「昔物語の構成」(『国語国文』昭和一八・六、八、九)を経て、玉上氏は「源氏物語の本性」と副題するいくつかの論文「物語音読論序説」(『国語国文』昭和二五・一二)「敬語の文学的考察」(『国語国文』昭和二七・三)「屏風絵と歌と物語と」(『国語国文』昭和二八・一)「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御」(『国語国文』昭和三〇・四)等を書き進めたが、たとえば、

いっしか物語を小説と考える人が多くなってきた。小説と見なすことが、物語の価値を高めることになる、思つてなのであろうか。しかし小説が認められ初めたのは前世紀ごろからであつて、日本ほど文学を独占する状態を示している国は、ほかにどこがあるであらうか、わたくしは知らない。小説と見なすことによって物語の価値を高めんとする人は、いずれまた比すべき他物を探し求めることであらうか。かかるはかなきわざのために、もし、物語の本義本性を失うことがあつたら、その利少なく害多きは言うをまたない。(『物語音読論序説』の前書き)

と述べている玉上氏の念頭に、批判さるべきものとして並ぶ源氏物語論がどういうものであるか、武田氏の成立論を支持する、あるいはそれを抛りどころとして源氏物語に接近しようとする数多い諸研究を想定することはきわめて容易であるが、じつは武田氏の成立論そのものも、氏によれば近代の小説文学を読むのと区別なく源氏物語を扱う姿勢にほかならないことになるようである。

もちろん成立論は成立論なりに、伝統的な源氏物語観への果敢な反逆であり、それからの解放の営為

であった。前引した玉上氏の文章に「源氏物語といえは『玉の小櫛』と『評釈』に従っていけばよかったところに比べると、まことに隔世の思いがあり、御同慶の至りである」とあることも思いあわせられる。じっさい戦後の成立論の始発である武田宗俊氏の「源氏物語の最初の形態」が発表されたとき、これに衝撃を受けなかった人も稀であつたろう。もちろん前記のように、そこには先蹤があつた。和辻氏の「源氏物語について」を顧みれば、いかにそれが革新的であつたか、そのためにそう簡単に学界に迎えられなかったこともいままさらながら実感されるし、その点は青柳氏や玉上氏の論考とて同断であるが、武田氏が、ほぼ青柳氏の姿勢を受け継ぎながら、青柳氏の説——物語の作者が最初に執筆したのは「若紫」巻であり、次いで「紅葉賀」「花宴」「葵」「賢木」「花散里」「須磨」とつづけ、前に戻って「帚木」「空蟬」「夕顔」「末摘花」を書き、次に「須磨」のあとをつづけて「少女」前後まで及んだとき、再び戻って「桐壺」巻を書いたのであらうという。ここですでに「若紫グループ」と「帚木」グループという二系列の巻々が分別されている——を、さらに第一部全体の問題におしひろげ、第一部三十三帖を「紫上系」十七帖「玉鬘系」十六帖の二系列に腑分けして、「紫上系」を源氏物語の最初の完結的な形態であるとし、その「紫上系」に、あらためて後に「玉鬘系」が書かれ挿入されたであらうとした推論は、その明快な論定の方法も手伝って、まさに偶像破壊的な意味を担っていたのである。

しかしながら問題は、伝統的な源氏物語観から離脱して、どういう方向に新しいそれを結成するかにあった。御同慶の至りであるとした玉上氏の言葉にこめられた皮肉は、近代的な合理主義的裁断に源氏物語をさらそうとする態度に対して向けられたものにほかなるまい。

### 三 武田宗俊氏の成立論の問題

まさに武田氏の成立説には、ある種の近代的な文学観を基底とした明快な合理主義的思考が顕著であるということはできるであろう。

玉鬘系後記説を、余りに近代的、合理的見解で以て貫こうとしたものである。古代人にとっては今日合理的に見えないことも不合理とは見られなかったのだと考える人もあるが、不合理は環境や習慣の相違によって解消するものではない。環境や習慣の相異を因として不合理に見えるというのは真の不合理ではない。真の不合理は古代に於ても今日に於ても同じである。今日吾々が見て不自然、不合理と考えるこの物語の矛盾や不統一は、この物語の成立した時代には、矛盾でも不統一でもなかったと見ようとするのは、この物語について長く考えられて来た、今の巻の順序に書かれたとの見方に反することが、何か古代的な考え方に反するものとする先入見から来たものに過ぎないであろう。（『源氏物語の第一部の構造について』『文学』昭和三一・一一）

という武田氏の論じかたにも、氏の姿勢は顕著である。いったい多くの諸家の武田説への反論が、武田氏にとつてはほとんど再考の余地もなく、したがって自説を撤回する必要がまるで見出だせなかったということは、甚だ興味ふかいことであるが、その理由は明白である。すなわち反論の多くが、氏の説の論拠を逆手にとつてのそれであり、氏の説を否定しようとすること自体が目的であるかぎり、それはいわばシーソーゲームのごときものにすぎないから、論争は高い次元に発展することなく、見解の相違ということで何となく終熄せざるをえないことになる。たとえば武田説に対して、もっともきびしい論鋒を突きつけたのは三宅清氏であつたが（『源氏物語の構想』『東京大学教養学部人文科学紀要』第七輯、「源氏物語

の内部構造」『文学』昭和三二・七など、これに対して書かれた武田氏の反論「源氏物語の第一部の構造について」（前掲）は、いささかもひるむことなく堂々たる風貌を呈している、と同時に氏の前説とくに変わった見解をよむことができないのも注目される。こうした論文を見ると、武田氏の内部にはほとんど信念のごとき近代的文学観がいだかれていて、氏の成立説の支えとなっているかのようである。ここで氏は、ゲーテの「ファウスト」や「ウィルヘルム・マイスター」や、志賀直哉の「暗夜行路」、夏目漱石の「吾輩は猫である」の例を引き合いにして、こうした長大な作品において、いかに成立事情や成立過程を顧慮することが必要であるかを説き、源氏物語の場合についても、

……その精神内容には前後に大きな変化があり、その点から見ても、相当長期の年月をかけて書かれたと推定される。又作品の内部にも相当長期にわたったと見るべき徴証が幾多存するので、之を短時日に完成したと見ることは出来ないであろう。しかして、その構造を見ると複雑で、単純なプランによってつづけて書かれたものとは誰も断定出来ない。源氏物語が完璧であるとの先入見から離れて見るとそこに幾多の矛盾が見られるのである。その成立過程をさぐってその矛盾の因由を見ようとするのは極めて自然なことではなからうか。文芸作品の研究でその形象に即して精神内容を明らかにすることの一番大切であることはいうまでもないが、一番重要なことがいつも最初になされねばならぬと決ったものではない。私は従来源氏物語の研究に見られる欠陥の一つは内にふくむ大きな発展を忘れて、一の固定観点から全体を把握しようとする所にあると考える。成立過程の研究は、この精神発展に具体的な根拠を与えるものとして決して輕視することを許さぬであらう。なお鑑賞享受と学術研究とは異なることをも注意する必要がある。鑑賞享受に於いてはあるものをそのままに受取って終りとしても差支ない。しかし学問に於いて、何時、誰が、どうして、なぜに等の疑問をそのままに止めることは出来ないのである。

と述べているが、武田氏が自説を固持して譲らないのは、右論文からさらに数年後に書かれた『紫上系諸巻』と『玉鬘系諸巻』の問題」（『解釈と鑑賞』昭和三六・一〇）においても変わるところはない。

が、ここで少なからず気になるのは、武田氏の「成立過程の研究はこの精神発展に具体的な根拠を与える」といういいかたである。この「精神発展」とは何であるか。氏の「最初の形態」に、玉鬘系後記説の一つの大きな論拠として、紫上系は玉鬘系よりも「文体」「技巧」「人生観」等が劣っているという把握がなされているのに対応するのであろう。氏によれば、紫上系は、工夫洗練を凝らした文であるが、幾分堅苦しく内面的リズムの流暢さはない。対して玉鬘系は軽く流麗で自由自在、筆は心とともに動いているという。技巧・構想力の面でも、紫上系はすべて正を踏んで、悪くいえば常套的平凡であるが、これに對して玉鬘系は警拔である。人物描写も、前者では抽象的觀念的で個性に乏しいが、後者では生き生きと個性的である。恋愛心理、自然描写においても前者は伝統的であるが、後者は形式的伝統を超えて前人の見ぬところに生新の美を見出だしているという。さらに批評精神や人生観等に関しても両系の多少高低、異なるというのであるが、これらをひっくるめて「精神発展」と称することができるかどうかは別として、右のような断定は、そのかぎりでは、私は必ずしも否定するものではないにしても、少なくともとらさもここに列挙される諸側面が、右のように指摘されるにとどまり、以後それ以上追求され検証にされることがなかったという点が問題なのである。

いったい『源氏物語の研究』の序によると、武田氏は文学史研究者として、文学理論と文学史的事実の研究とを関連させ進めることを志したという。国文学界では文学理論や研究方法において眼を十分に広い世界に開いている者が少ないのが遺憾なので、ドイツ、イギリス、アメリカ等の文学理論書に眼をさらすこと数年、いささか得る所あって国文学の研究に帰り、平安時代の文学につきその発展のあとを

たどり、作品の内容や価値について新しい光をあてたいと願ったという。ここにいうドイツ、イギリス、アメリカの理論書というものが具体的に何であるかは不明であるが、そうした理論書に学んでの氏の源氏物語把握が『源氏物語の研究』の第三章「源氏物語の本旨と構造」に要約されることきものであるとすれば、それはいかにも古色蒼然の印象をまぬかれないのである。

……紫上系物語は（中略）は栄華の生活、みやびの生活を背景に、当時の貴族男女の最大の興味を集めた恋愛を主材とし、時代の特種条件の下に立つ恋愛生活の葛藤・矛盾や、之を解決し調和を与えた理想状態を描いたものである。勿論その問題や解決は意識して取上げたものでなく、生活における興味が自らそこに導いたものである。

紫上系では理想化が目立ち、人物も最高の階級からとり観念的で具象性が少いのに対し、玉鬘系では身近に観察する中流階級からとって現実に近い感を起させる。このように日常の観察から材をとって、現実的な諸女性を描き、恋をうつつして、理想に偏して空想的であった紫上系を補うのが玉鬘系を書いた意図であったろう。

第一部は理想主義的態度によって描かれたが、その理想は高いとはいえず、第二部は写実的態度によって現実の苦悩をうつつして漸く真実にせまり、第三部にいたって個の中に時代をうつつし、時代を超えて人間の永遠普遍をうつつして、最も深い意味での象徴的真実に達したといつてよいであろう。源氏物語は第三部に至って真に傑作の名に値する。

ここによまれる、いわば有機的な源氏物語観は、これが武田氏の成立説を不動のものにしたのであったと同時に、そこに明確な限界も語り示されているといわざるをえないようである。武田氏が、源氏